

目次

29	巻頭言	吉川 泰弘
30	連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第11回	地獄谷での天国のような暮らし…山極 壽一
32	連載「今日もOSARU日和」第1回	モップくんとザルバ様…竹下 景子
34	連載「生態学者が往く」第7回	ブラジル・パンタナールの旅…湯本 貴和
36	連載「野生動物を遺伝子から見る」第2回	やりたいことがわからない…村山 美穂
38	連載「野生動物のおなかの中の秘密」第2回	野生チンパンジーの不思議な食習慣…牛田 一成
40	連載「大型類人猿探訪」第14回	霊長類の「文化」…林 美里
42	連載「ウマ学ことはじめ」第14回	モンゴルのウマと遊牧…松沢 哲郎 リングホーファー 萌奈美
44	連載「自然と芸術」第11回	京都造形芸術大学の沖縄研修旅行に参加して…青木 秀樹
46	連載「海外生息地調査」第14回	肉食獣と私たちの祖先との関係は？…中村 美知夫
48	連載「動物園・水族館だより」第5回	第14回国際環境エンリッチメント会議を終えて…山梨 裕美
50	岡山・神庭の滝のニホンザル(勝山集団)	中道 正之
52	イヌとヒトの共進化	菊水 健史
54	賢者の営み:台湾パイワン族のイノシシ狩猟	野林 厚志
56	ご寄附のお願い・イベントのご案内	

■表紙の言葉

モンゴルの草原で6歳の少年ダシジルアがウマを自在に乗りこなしていた。鞍をつけずに裸の背中に乗ることもある。遊牧民だ。ゲルと呼ばれるフェルトの布で覆われた円形の家に住んでいる。ウマ、ウシ、ヤギ、ヒツジを飼っていた。草原で自由に草をはむかれらを追い集めるしごとだ。現地で「モリ」と呼ばれる去勢されたオスに乗る。メスは乳をしぼる。まず子ウマをひもにつないでおく。それをひもという母親の乳房を吸わせて乳汁分泌を引き起こし、それを途中から人間が横取りするしくみだ。ウマの乳に以前の残りなど酒の素(スターター)を加えてかくはんを続けると馬乳酒になる。アルコール度わずかに1-2パーセント、白濁したやや酸味の強い味だ。目を閉じると、果てもなく広がる緑の草原が浮かんでくる。(撮影:松沢哲郎、2019年7月25日)



松沢 哲郎 まつざわ てつろう
京都大学高等研究院・特別教授。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院のコーディネーター。公益財団法人日本モンキーセンター・所長。中部大学創発学術院・特別招聘教授。

巻頭言

吉川 泰弘 (岡山理科大学獣医学部)

19世紀末のフランス印象派の画家ポール・ゴーギャンは、少年時代を南米で過ごし、フランスに戻った。画家になってからフランスを捨てて、2回タヒチを訪れそこで生活し、独特の絵を描いた。その人生の集大成ともいえるものがタヒチで描かれた「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」という作品だ。

20世紀の100年間は、人類の歴史の中でも不連続的に発展した世紀だ。自然科学が人文科学を凌駕し、物理学も化学も生物学も強烈な勢いで進んだ。人類はそれまでの歴史の数十倍のエネルギーを生産・消費し、人口も数十倍に増加した。しかし、深刻な問題も産み出した。自然破壊や環境破壊、貧富の格差、人種の差別が顕在化し、戦争・テロが頻発した。

21世紀を迎えて、人類の目標は「高度成長社会」という20世紀のスローガンから「持続可能な社会の確立」に変わった。国連が掲げるSDGs(持続可能な開発目標)にはたくさんの目標が挙げられている。しかし基本的なゴールは、環境保全と生物多様性の維持、食料安定供給と人口増加の制御、感染症の統御の3つだろう。こうした課題の突破口として、「自然科学の立場から、ヒトはどこから来たのか? 何者か? どこに行こうとしているのか?」というライフサイエンス(生命科学)を基盤とした問いかけが非常に重要になっている。

人文科学の政治学、経済学、教育学、哲学は、人間社会を理解する、人間を中心とした人間のための

学問だ。また、自然科学の工学、薬学、農学、医学は、人に役立つ研究という、人間を中心とした人間のための学問だ。しかし理学は、宇宙物理学、量子力学、動植物学など、必ずしも人間中心の学問ではない。なかでも霊長類学や獣医学は、比較動物学を基本に置く点で、ヒトと他の動物を同じ視点で考える。21世紀の課題を突破するライフサイエンスを担う人材の養成に適した学問といえる。

ニホンザル研究から進んだ日本の霊長類学は、動物に対して群れ社会の中の個を識別・追跡するという獣医学や従来の動物学にはないアプローチを開発し、非常に多くのユニークな発見を積み重ねてきた。ヒトの隣人としての類人猿の研究は、ヒトと非ヒト霊長類の共通性と相違性は何かをさまざまな視点から研究している。「生物としてのヒト」という概念を取り戻すのに、最も適した研究領域だ。

21世紀に入って四半世紀が過ぎようとしている現在、世界は共生・協調からむしろ反対の方向に進みつつあるように思う。次世代を担う若人が野生動物学、霊長類学、獣医学などで学び、ヒトという存在を特別視しないで、真に「持続可能な社会の確立」を目指してくれることを期待したい。



吉川 泰弘 よしかわ やすひろ
長野県生まれ。東京大学農学博士。国立予備衛生研究所厚生技官、東京大学医科学研究所助手・講師・助教授、国立予備衛生研究所筑波医学実験用霊長類センター長、東京大学教授、北里大学教授、千葉科学大学副学長を経て、現・岡山理科大学獣医学部長。